

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースィングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

第二次大戦の「戦後処理」を巡る日独の違い 欧州の『仲間』だったドイツ アジアで日本は !?

新春講演会： 黒川 剛氏語る

「二つの大戦と日独関係」をテーマにした当協会の新春講演会が2月21日、千葉市中央区の同市生涯学習センターで開かれた。講師の(公財)日独協会(東京)理事、黒川剛氏は、第二次大戦後近隣諸国との和解をめぐる日独両国の相違を、当時の国際情勢や歴史的観点から詳述した。同氏は「両国を同じ前提で比較し論ずるのはやめよう」と呼びかけるとともに、「共通の価値観で新たな日独関係築くことが大切である」と強調した。戦後70年の「安倍談話」が論議を呼ぶ中、タイムリーな内容に会員60人を含む約90人満席の会場は熱気に包まれた。

今年の講演会は千葉県と、(公財)日独協会(東京)の後援を得て開かれた。

黒川氏は、ドイツ、オーストリアなど永い間外交の第一線で活躍し、日独関係の第一人者で知られる。会場では、会員たちが配布された同氏の講演レジュメに目を通すなど関心の大きさを窺わせた。

黒川氏は、日独修好条約から150年におよぶ両国の関係について「全体としてはあまり緊張した関係ではなかった」と述べた。同氏は「20世紀の二つの大戦で日本がドイツから学んだ/学ぶべきだった/学び得たかも知れない問題」を取り上げた。軍への civilian control、二正面作戦の破綻、総力戦の実態と備えなどを語り、日本が第二次大戦を前に自らの安全保障を考えるうえで貴重な教訓を得ないで無謀な戦争に突入していった実態を示した。

会場の注目を集めたのは、黒川氏が第二次大戦後、日独両国と隣国や地域との関係に触れた箇所だった。「戦後処理」といわれるもので、両国が欧州とアジアでそれぞれ置かれた状況、つまり①終戦後の政治的、



<講演する黒川 剛氏>

21世紀に入った最近の日独関係について黒川氏は「精神的距離は広がっている」とズバリ指摘し、“親独派”の比較的多い日本に警鐘を鳴らした形。これは日本以上に対中接近を強めているメルケル政権を念頭に置きながら、日独関係が新たな関係構築が必要な時期を迎えていることを強調した。同氏はこの“距離感”を認識して「両国共通の世界観・価値観を探して新しい関係を築く努力が必要であり、若い人に繋げていく努力をしよう」と訴えて、会場の共感を呼んだ。

軍事的環境②歴史的、文化的関係③戦中、戦後の対応などの観点から話しを展開した。そのうえで同氏は両国がそれぞれの地域で「仲間」であったかどうかを今日の立場や評価を分けた、と述べた。

懇親会も和やかに

講演会に続き会場隣接のレストランで懇親会が開かれた。この席でも黒川氏に質問が続き、この日の講演に対する会員の関心の深さをうかがわせた。黒川氏は学友の平尾浩三名誉会長や子安美知子氏とにこやかに懐旧談にひと



時を過ごしたり、この日千葉大学に留学中のドイツ人女子学生5人が当協会会員宅にホームステイをした縁で招かれて華やかな彩を添え、楽しい歓談の中でプログラムを終えた。

(橋口 昭八)

<講演要旨と、講師略歴は2頁に>

【講演要旨】（「近隣諸国との関係からみた日独両国の『戦後処理』」に絞って要約した）

◆第二次大戦の戦後処理をめぐる、ドイツ人ばかりか日本人にも「ドイツは過去とまともに向き合い罪を償ったので、欧州へ再び受け入れられた。日本は過去との明確な対決を避けてきたので、近隣諸国との関係がうまくいっていない」と主張する人々がいる。これは戦争直後から現在まで両国の置かれた条件が同じだという誤った前提にたっている。戦後のドイツが置かれた状況はどうだったか。

①戦争が冷戦に移行したことで、ドイツと西欧諸国はソ連型共産主義という共通の敵・脅威に直面することになった。西側はこの脅威への防壁として（西）ドイツを必要としたのであり、西独のアデナウアーは、西欧への統合を通じて復興を加速することで、結局は東西ドイツの再統一をも早めることができると考えた（所謂マグネット・セオリー）。勝者と敗者は共通の利益で結ばれたのであった。

②ドイツは政治的統一こそ遅れたものの、近世以降学術・文化・産業技術の分野ではれっきとした西欧の主要メンバーであるばかりか、カント、ゲーテ、ベートーヴェンの名が示すように欧州のリーダー格ですらあった。欧州諸国は時には喧嘩（戦争）をしたものの「手打ち」が終われば昔の仲間に戻ったのであり、永久に共には天を戴かないという関係ではなかった。

③ドイツの第二次大戦戦後処理の特徴は、ドイツの罪を明確に認めつつその対象を「ナチスによるホロコースト」に集中したこと。無抵抗非武装の人々を特定の人種に属するというだけの理由で大量に虐殺することは如何なる申し開きも出来ない犯罪であるが、それを行ったのはドイツ国民全体ではなくナチスという悪人集団だった、というわけである。最近亡くなったワイツゼッカー元大統領が戦後 40 年を機に連邦議会で「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」と演説した。これは日本でも有名になった。元大統領は「一民族全体に罪があるということはない。『罪』は集団的ではなく個人的なものだ」と指摘し、従って次の世代がその罪を引き継ぐことはできないが、「ドイツ人全員が過去に対する『責任』を負わされているのだ」と述べた。「罪」と「責任」を明確に分ける理論展開で、今日のドイツ人を罪悪感から解放し彼らに精神安定剤を与えたと評されている。他方、彼がニュルンベルク国際軍事裁判でナチ時代の外務次官であった父の弁護人として活躍し父を死刑から救ったことを想起し「父親の罪を免れさせておきながら現在のドイツ人に責任を負わせるのか」と批判する人々がいたのも事実である。



＜満席の会場で熱心に耳を傾ける会員たち＞

◆ 戦後の日本をとりまく状況はどうであったか。近隣諸国と日本を結びつける共通の利益、共通の脅威はあったか。最も近い隣国である中国や朝鮮半島の北半分は冷戦時共産圏に属し、米国と組んだ日本が再び自国への脅威になるのではないかと恐れていた。日本はかつて中国や朝鮮半島から多くを学んだ。他方、日本が 19 世紀後半に急速に近代化したのに対し大陸諸国の歩みは遅かった。白人勢力ならともかく同じ黄色人種のかつての朝貢国が先進国面をしているのに釈然としない気持ちをもつ人々もいるだろう。また、東アジアでは戦争は政治ゲームであり講和条約によって清算されるという欧州的な文化は形成されなかった。日本にはヒトラーは居らず、ナチ党も存在しなかった。満州事変以降の日本の国際政治での行動の大半は（それがすべて「侵略行為」という曖昧な定義に当てはまるか否かは別として）日本国民の圧倒的多数の支持のもとに実施されたものであった。「すべての罪は軍閥にある」という逃げ口上は通用しない。

◆ 近年日本とドイツの間の相互の関心は必ずしも強まっているとは言えない。それは世界全体の情勢の進展に伴って生じた現象であり、日本人とドイツ人だけの努力で解決される問題ではない。戦後 70 年は政治的イデオロギーの対立が支配する世界であったが、最近では中東や東欧に見られるように宗教的イデオロギーやネオ・ナショナリズムにもとづく対立が目立っている。こうした情勢の中で、日本とドイツを含む西欧が共有する世界観、価値観そして共通の利益があらためて認識され、その認識にもとづく行動が模索されてよいのではなかろうか。そしてその認識が若い世代に引き継がれることが肝要である。

講師略歴：1932(S7)年、東京生まれ。東京大学、ハンブルク大学で学び外務省入省。在西ドイツ大使館参事官、西歐第一課長、国際協力事業団理事、在オーストリア大使を歴任。元中央大学教授。現（公財）日独協会理事。訳書「政治家ヒトラー」「人間ヒトラー」（サイマル出版）「日本はなぜユダヤ人を迫害しなかったか」（芙蓉書房出版）など。

アウシュビッツ平和博物館
(福島県)を訪ねて

小高い丘の博物館は閑散としていた。受付に年配の男性が1人いるだけだったが、展示室は凄惨な歴史の暗部を伝えていた。福島県白河市に「アウシュビッツ平和博物館」(同市白坂三輪台 245 ☎0248-22-2108)があると聞いて、昨年暮れに友人と訪ねた。

1988年から10年間で90万人を集めたという「心に刻むアウシュビッツ展」が全国を巡回したのを機にポーランド国立オシフィエンチム博物館の協力で、栃木県塩谷町に開設し、さらに本格的展示を目指して白河に2003年オープンした。本館は茨城県の江戸中期の古民家を移築したもので、その本館に収容所の成立からガス室、人体実験などの写真が並ぶ。



<展示されている腕章など>

別館はアンネ・フランク・ギャラリー。展示棟の中にはビデオ室があり、手づくりのテープが20分上映される。「ユダヤ人はなぜナチスに虐殺されたのか」「なぜユダヤ人は立ち上がることなくガス室へ歩んだか」。今年1月27日、旧ソ連軍により収容所が解放されて70年を迎えたが、ドイツのガウク大統領が式典で「ホロコーストに思いを馳せることはすべてのドイツ国民にとって重要だ」と述べた。「ナチスによる大虐殺は決して忘れてはならない。戦争のない平和を」。改めて心から祈った。

(北村侑三郎)



Eine Frau in der Erinnerung
思い出の女(ひと)



澤井 秀之

「今だ!」。穏やかそうな婦人と目が合った瞬間、私は思った。「Guten Tag」。ライン河下りの船上で隣り合わせた女性に話しかけていた。「ドイツ語でドイツ人と話してみたい」。その機会が漸く、訪れたのだ。

その婦人も「Guten Tag」とにこやかに返してきた。甲板の売店で求めたワインのグラスを傾けていた私は、思い切っただけで彼女に近づいた。河面を渡る微風が軽い酔いでほてった頬に心地よい。婦人もグラスを手に仲間と歓談していた。私は大胆になって、片言のドイツ語とジェスチャーで自己紹介を試みた。彼女はゆっくりした口調で彼女自身に起きたことを語り始めた。



<今は、思い出深いスナップ>

国境に近いフランス領内に住んでいること(それは彼女が持っていた地図で示してくれた)、兄弟たちと旅行に来ていること、夫を早く亡くしたこと、病院の掃除婦をして子供4人を育てていること。彼女の口から次々に語られる「半生記」。すべてを理解したとは言えなかったが、苦勞の多かったであろう女性の人生に思わず、耳を傾けていた。

初めての海外旅行で妻と出かけた「ドイツの二日目」のことだった。古城、ブドウ畑、中世風の民家など、次々に変わる岸辺の風景をツアー仲間と堪能する。堤防側面に書かれたドイツ語を読めるのがうれしい。ローレライの岩は想像していたよりも大きいな。船乗りを惑わせた水の精はどこに座っていたのだろうか。

彼女たちの一行と、私たちはともにボツパルトで下船した。互いに、「Gute Reise!」と言葉を交わす。二度と会うことがないであろうこの女性の幸せを心から祈った。彼女の低めの声と、握手で伝わる苦勞人の掌の感触は、私の貴重な財産である。「会話は度胸だ」を実感した旅は2002年8月のことだった。

ドイツ旅行で貴重な体験をした私は、以前から東京で続けていた大学の独文解釈の社会人講座に加えて、自宅近くのカルチャーセンターのドイツ人女性による会話にも通い始めた。しかし、相手の発音がなかなか耳に入ってこない。あの船の思い出と状態はあまり変わらない。その後もほとんど進歩しているとは思えずに、会話教室や講座から足がしだいに遠のいていった。

しばらくして知ったのが千葉県日独協会だ。この協会で行われるドイツ語の学習に期待をかけることにした。苦手意識が強くなったドイツ語会話はともかく、ドイツ語の解釈と作文の勉強は続けて行こうと思っている。歴史も文化も異なる日独両国。そのドイツ人とドイツ語で意思の疎通ができる素晴らしさを教えてくれた「船上での出会い」。私の学習意欲の背を押してくれるのは今でも「あの女性」である。

□これからの催し

◆千葉県日独協会 理事会

日時：4月25日(土)12:00~14:00

場所：船橋市東部公民館 第3集会室

JR津田沼駅から徒歩3分 ☎047-477-7171

議題：2014(H26)年度事業報告(案)、同決算報告(案)、
2015(H27)年度事業計画(案)、同収支予算(案)、
その他

◆千葉県日独協会 総会 & 記念講演会

日時：5月16日(土)14:00~15:30

場所：船橋グランドホテル

JR船橋駅から徒歩3分 ☎047-425-1121

議題：2014年度決算報告(案)、2015年度予算(案)他

記念講演：テーマ「日独軍楽交流史」

講師、谷村政次郎氏(元海上自衛隊東京音楽隊長、
現スーザー協会会長)

懇親会：同日 15:40~17:30 会費¥5,800/1人

新入会員

(敬称略)

- ▽個人会員：比田勝 孝昭 S 3. 11 生 佐倉市
- ▽同：比田勝喜美子 S23. 5. 生 //
- ▽同：辻本 惇貴 S 3. 8. 生 成田市
- ▽同：松本 明日香 S48. 2. 生 千葉市中央区

出版

前駐日ドイツ連邦共和国大使、
フォルカー・シュタンツェル(Volker
Stanzel)氏が本を出版し(写真右)、
話題になっている。

同氏は日本に留学したこともある
日本好きで、在任中のブログ「大使日記」を加筆・再
構成した。幻冬舎によると、内容は「外国人の思う本
当にいい日本語とは」「ドイツ科学を救った日本人」
のほか「敗戦国としての日本とドイツ」「隣国と和解
するということ」など。¥1200(税別)。



映画「パリよ、永遠に」
("Diplomatie") が各地で上映さ
れている。監督はフォルガー・
シュレンドルフ。原作はフラン
スで大ヒットしたシ ril・ジェリー作の舞台
("Diplomatie")。在日ドイツ大使館の HP やパンフレ
ットなどによると、ドイツ人でありながらフランスで
映画監督として研鑽を積んだ名匠の名が高いシュレ
ンドルフ監督がジェリーとともに共同で脚本を手が

け、映像化した。シュレンドルフの前作「シャトー
ブリアンからの手紙」と同様にこの作品も『仏独の
和解』が隠れたテーマだとされる。

物語は第二次大戦末期 1944 年 8 月 25 日のパリが
舞台。ノルマンディーに上陸した米英など連合軍が
パリに到着する。ヒトラーからナチスドイツ軍を率
いるパリ防衛司令官、ディートリッヒ・フォン・コ
ルティッツに「パリ壊滅作戦」の命が下る。



<緊迫した心理的駆け引きが展開する> (ドイツ大使館 HP)

エッフェル塔はじめ、ノートルダム大聖堂、ルー
ヴル美術館、オペラ座、セヌ川に架かる多くの橋
に爆薬が仕掛けられ、夜明けを期して木端微塵に吹
き飛ばす作戦が着々を進められるという設定だ。

コルティッツが駐留するパリのホテルに、スエー
デン総領事ラウル・ノルドリンクが隠し階段を使っ
て現れる。パリ育ちでパリを愛してやまないノルド
リンクは、人類のために破壊を断念するようにコル
ティッツの説得を始める。

真夜中の、閉ざされた一室で繰り
広げられる総領事と司令官の応酬。
そして、運命の夜明けが・・・ 真に迫る二人からひ
と時も目が離せない。見ごたえたっぷりの大人の映
画だ。鑑賞をお勧めしたい。(遠藤 斌)

※ヒューマントラストシネマ有楽町(上映中)
☎03-6259-8608 / キネマ旬報シアター(柏市・
5/9 - 5/22) ☎04-7141-7238

編集後記 4月号は「戦後70年」特集になったよ
うだ。黒川氏の講演は示唆に富んでいた。
ワイツゼッカー元大統領は、ナチの「罪」とドイツ国民
の「責任」を分けた。その責任を”Haftung”(契約履行の
「責任」)で表現したという。「過去に対する責任を負わ
されている」にある。演説には Verantwortung,
verantwortlich の言葉も出てくる。若い人と歴史の責任
に触れた箇所である。ドイツ語と日本語の違い、両国民
の思考の違いについて改めて考えさせられた。(M.T.)